

舞踊作品研究 — 事例研究 —

松本 千代栄

本間 清美

I. 研究目的

従来の舞踊作品研究を鳥瞰し、対象作品の構造および美的特性が明らかにされていない点に気付く。そこで、本研究は、より詳細に舞踊現象をとらえようと試みるものであり、作品の表現特性を顕著にする要因を抽出するとともに、客観性をもち得る舞踊の群舞構成の原理の一側面を見出すことを目的とする。

II. 研究対象および研究方法

1. 研究対象作品

- ① Maja Lex 作品 “Passacaglia and Fugue”
16mm film 収録 作品時間 6分24秒
- ② 横井 茂作品 “白 炎”
VTR 収録 時間 70分
- ③ 竹屋 啓子作品 “静” (作品①②と個人作品との比較のため)
16mm film 収録 時間 6分38秒

2. 研究方法

(1) 質問紙法

舞踊作品のもつ作風とその伝達性を明らかにするために、作品の作風を示すと解される用語(下記 a~k)を先行研究舞踊批評用語の中より抽出し、辞典に基き解説を付記した。次に作品①~③を観賞させ用語およびその選択理由を記述させ、構造要因と思われる柱をたてて整理した。

<用語>

- a. 抽象的 b. 幻想的 c. 技巧的
- d. 劇的 e. 宗教的 f. 力動的 g. 感覚的
- h. 構成的 i. 視覚的 j. 叙情的 k. 写實的

(2) フィルム分析

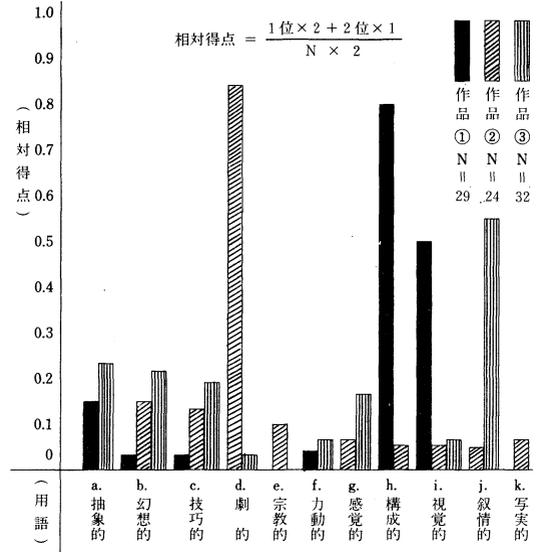
作品を収録した 16mm film および VTR を用いて運動の分析を行なった。また、作品それぞれについて全体の構造分析を行い、研究方法(1)による評価の検証を試みた。

III. 結果と考察

1. 質問紙法について (図表 1 参照のこと)

作品①は、1位構成的、2位視覚的の順位である。その理由として “9人という人数による群化” “動き

【図表 1】 作品①②③の得点比較



がそろっている”などが挙げられ、さらに文章分析の結果、“視覚に訴えるシンプルな運動とその和声的变化” “9人という人数と内部分化する群化” “音楽形式との関連性”をこの作品の特性として考察できる。作品②は、1位劇的の評価が高く、選択理由は、“作品のもつストーリー性” “役割の明確さ”が挙げられている。また、文章分析の結果を考察すると、“ストーリーや役割についての明確な認識と、象徴的な実在を越えたものの幻想性との対比をマッチさせた上での劇的な作品”さらに“衣装・音などの効果”とまとめられる。作品③は、1位叙情的、しかし、2位以下との得点差が少なく、各項の選択理由は類似している。この結果ソロ作品は情調と演ずる技術が明確に観察・観賞でき、それらが評価の視点の動揺をもたらすと考えられる。文章分析の結果、作品の特性としては、“内面的なイメージと抽象的な運動を用いて叙情性を出している” “ソロ作品ではダンサーの素材的・技術的側面が観照者に与える影響が大きい”としているところからもこのことは考察できる。

2. film 分析について (図表 2~5, 図 1~3 参照のこと、紙面の都合上作品②については省略)

作品①：テーマの motive と考えられる運動の運動分析を行うと、単純な運動に肘を曲げるという “直” から “屈曲” への変化及びその際の速度の変化を加味する事によって、表現性をもつ最少の単位として運動のまとまりをつくっている。(図 1) また、全体構造を解明する手懸りとして、“群化と群の構成人数”(図表 2) “motive の反復”(紙面の都合上省略) “3群による動きのフーガ”(図表 3) について図表化した結果、急激的・漸次的群化と 3人ずつ 3群の群化をベースにした手法である事、3種類の motive の組み合わせ及びバリエーションを群の変化とともに行なっ

ている事、さらに3群によってほぼ同一のパターンのフーガ形式で運動を行う部分が出現している事がわかる。

作品③：このダンサーの特徴的な運動(図2~3)について分析した結果、遠心的・求心的運動、高低のレベル差、時間的アクセント、身体のphaseの多方向を認めることができ、これらによって“動き+ α ”の空間性・表現感を出していると考察できる。また、全体構造の図表化(図表4)から導き出せる結果は、deep levelが約30/sec.毎に使用されている、ステップの速度の変化によって“追い込み”と“ゆるやかに”のパターンが交互に出現する、turnの多くの使用などである。さらに、作品中、運動分析で検証した特性をすべて満たしているmotive(図表5)を図示した結果、一つのmotiveの中に、ジャンプ、回転、deep levelと表現効果の大きい要素を含み、さらに速度を変えた反復によって一つのphraseを形成していると考えられる。

IV. 総括

文章分析およびfilm分析で検証できた範囲内から、三作品を比較すると、次の通りである。(表1)

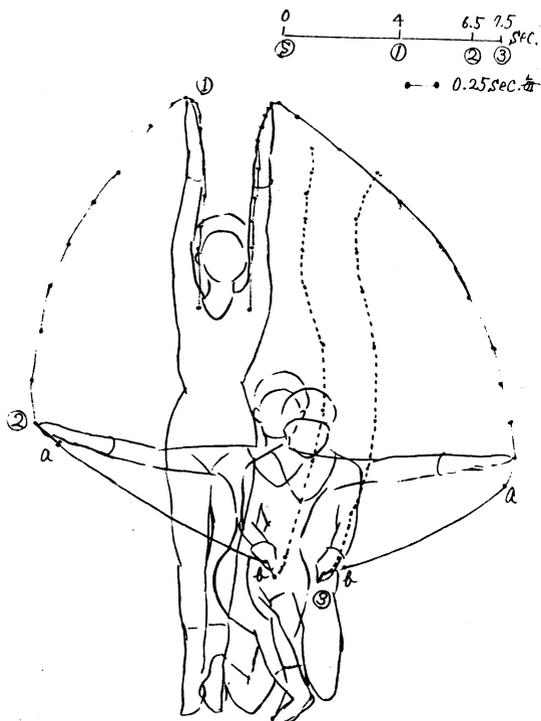
最終的に作品①②③に共通する構造化の要素を挙げると、1)シンボリック^(註4)運動、2)群が内部分化し、群の運動は単純化される傾向がある、3)最後に初めの部分を再起させるパートが出現する、の3点があげられ、これは評価の相異にもかかわらず共通であり、これらの点を群舞構成の原理の一側面と考える。

また、作品①②③に共通の要素は、1)最少限のまとまりをもつ運動にアクセントをもち込むことによって、舞踊運動(motive)化する、2)速度化の変化によって運動および作品の構造化を強化する、3)初めのパートを再起させるようなイメージをもつ運動が最後にも出現する。の3点があげられ、これらは作風の評価や構造・人数構成の差異を越えて、舞踊の構造化における原理となるものと考えられる。

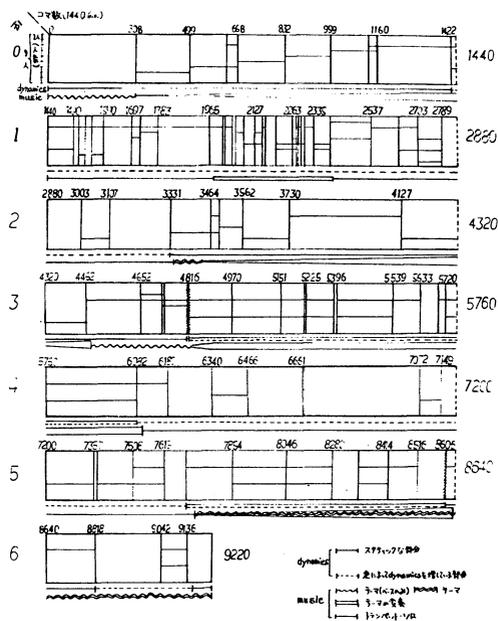
〔表1〕

要素化 \ 作品	① Passacaglia and Fugue	② 白 炎	③ 静
主 題	音楽の形式に基づく	サイン的言語 × シンボリック言語	“静”のイメージから想起される内面性
身 体	female - mass	male. female - mass male + female - duet	female - solo
運 動	シンボリック運動 (抽象的・非日常的) (エレメンタリーな運動)	サイン的運動 (対比) ↑ (調和) ↓ シンボリック運動	シンボリック運動 ↓ (高度なテクニック) イメージ化
変 化 (群化)	・動機となる運動の反復・再起 ・9人の内部分化 ・3群によるフーガ形式	・女性群舞によるテーマの再起 ・写実的場面と男女デュエットによる役割の分化	・単一モチーフ内でのアクセント ・同一モチーフの反復によるphrasingと速度の変化
構 成	・テーマの運動をバリエーションさせて最後に再起 ・運動群のハーモニー ・音楽的構成	女性群舞 サイン的場面—男女のデュエット	保持的パート、追いこむパートの急激的・漸次的調和
効 果		シンボリックの衣装・音楽 ↑ サイン的の衣装・音楽	シンボリックの衣装
作 品	構 成 的	劇 的	叙 情 的

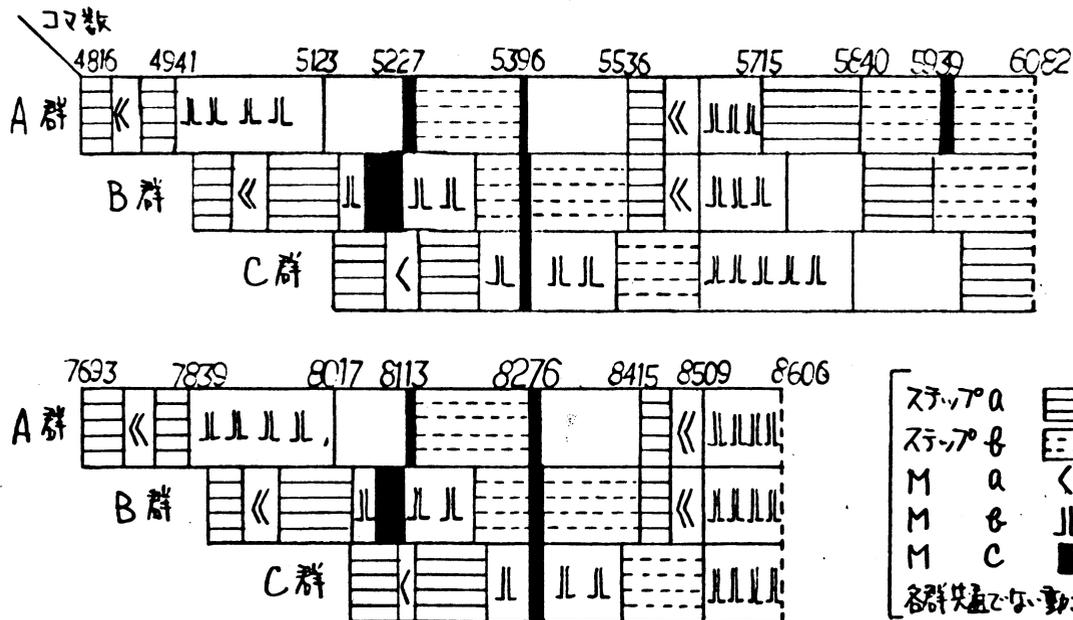
図1. Motive I



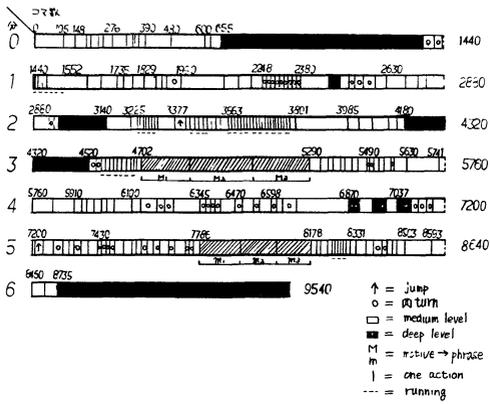
図表2. “Passacaglia and Fugue”
 <全体構造一群化と群の構処人数>



図表3. “Passacaglia and Fugue” <3群による動きのフーガ>



図表 4. “静” <全体構造>



図表 5. <motive → phrase>

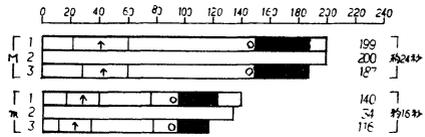


図 2. Motive — Repeat -----> Phrase

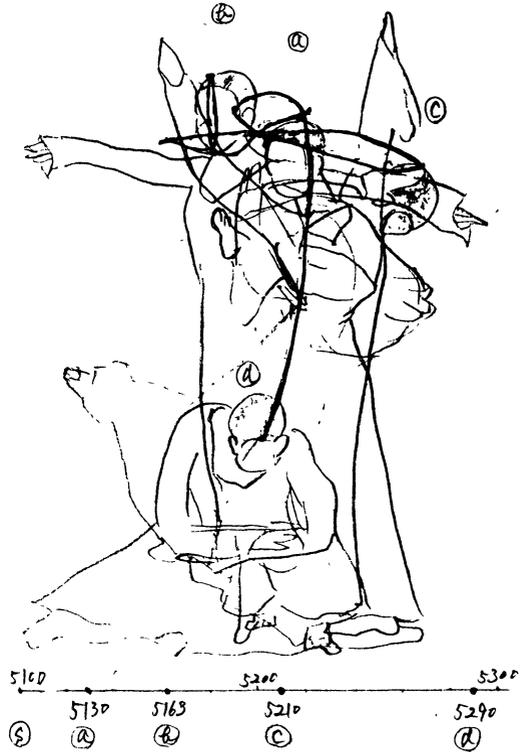


図 3-1. Centrifugal



図 3-2. Centripetal

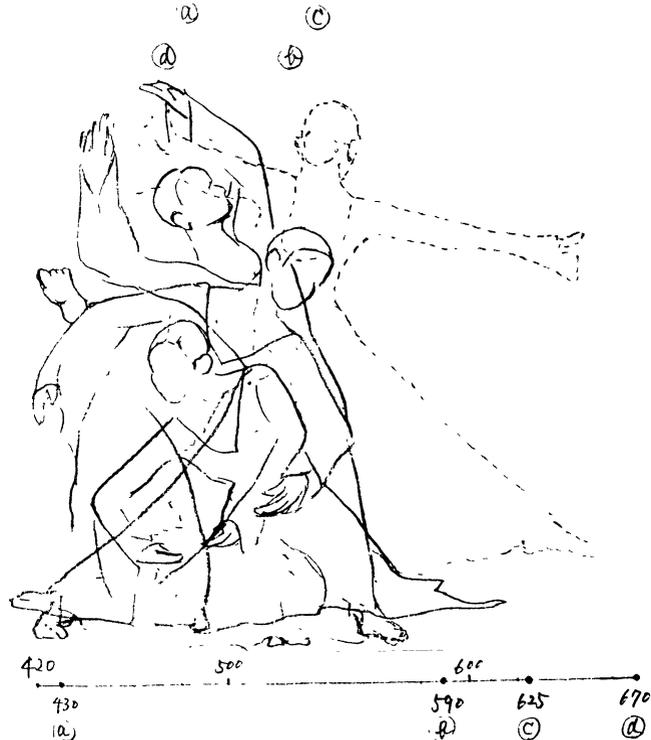
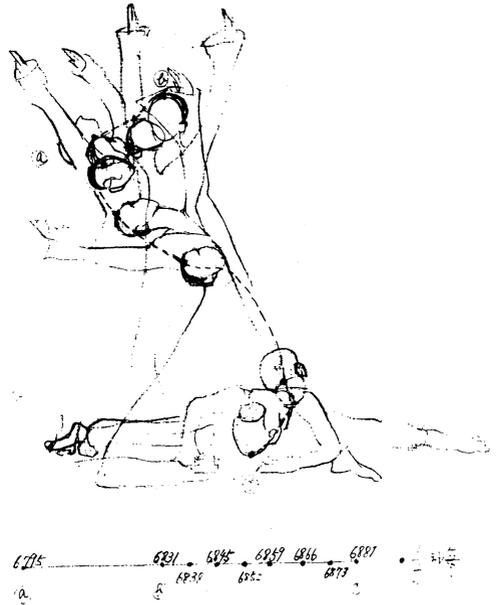
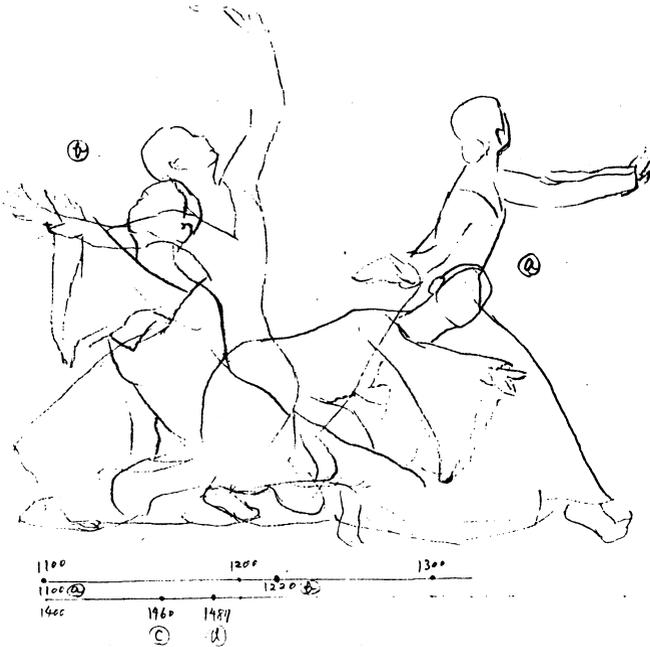


図4. 身体の phase の多方向性

図5. 高低の level と経路



- 註1) 「舞踊鑑賞価値基準表作成について」(松本・池田他)より、作品に対して与えられた評価語に基づき作成。
- 2) 『広辞苑』の語義に基づき作成した。
- 3) 「舞踊用語に関する研究II」(松本・山田他, 1978年, 舞踊学会発表), 「舞踊構造と要素化」(松本; 「女子体育」第21巻4号)を参照した。
- 4) “サイン的” “シンボルの” の用語は, S.K ランガー著『芸術とは何か』『感情と形式』中の語意を基に使用している。

図表および図の説明

- 〔図表2〕縦線は群の転換点, 横線は人数の変化を示す。群の構成人数の増減による漸次および急激的变化の手法, また, 群の転換は少なくとも, 全員が走を伴う同一運動によってダイナミックスを増す手法がみられる。
- 〔図表3〕図表2中, コマ数4816~6082, 7693~8606の3人ずつ3群による動きのフォーガは, ほぼ同一のパターンで2度繰り返される。A,B,C群とも, 初めの4つのパターンは, 完全なフォーガ形式をとり, また3群が同一運動をすることも認められる。
- 〔図表4及び図表5〕 $M_1M_2M_2$, $m_1m_2m_3$ では図2に示したモチーフが反復されている。
- 〔図1〕図中①→②は, ほぼ均等の速度で手先が移動。a→bは, 急激に速度が速まり, アクセントを加え, 舞踊運動化する。
- 〔図2〕一つのモチーフに, ジャンプ, 回転, deep, level と運動の美的表現効果が大きいと考えられる要素が含ま

れている。

- 〔図3-1, 3-2〕〔Centrifugal〕顔面の方向, 手先の指し示す方向が, 身体から外側にひろがってゆくことによって, 遠心的な表現感をもつモチーフとなる。
- 〔Centripetal〕肘のつくりだす角度および上体の傾斜等により, 求心的な表現感をもつモチーフとなる。
- 〔図4〕短時間に, 顔面の方向, さらに身体全体の局面 (phase) も多方向にむけ, ソロで支配できる空間の限界に挑むとみられる。
- 〔図5〕身体レベルを高から低へ変化する際, 頭頂の軌跡が, 最大の距離を迂回して下ることが認められる。

(本研究の一部は, 昭和54年度お茶の水女子大学人文科学研究科舞踊教育学専攻の舞踊方法論実験実習として行った。)